アメリカ陥落5

ロシアの鳴動

大石英司
Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　安田忠幸

地図　平面惑星

目次

プロローグ　13
第一章　シアトル空港　22
第二章　幌馬車隊　45
第三章　アダック島　70
第四章　チーム再結成　98
第五章　孤島の戦い　125
第六章　デルタ　150
第七章　狙撃兵対狙撃兵　173
第八章　霧の中の狼　195
エピローグ　212

北米大陸とアリューシャン列島
バンクーバー
シアトル・タコマ国際空港
ヤキマ
レイク・チャールズ
スウィートウォーター
ロスアンゼルス
NAS ポイント・マグー空軍基地

ペトロパブロフスク
エルメンドルフ
アッツ島
シェミア島
キスカ島
コディアック島
アダック島
グレート・スキン島
5km
モフェット山
空港
滑走路
ハマーヘッド湾
ウォーターフォール湾
アダック島

登場人物紹介

【日本】

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平　陸将補。北米派遣東郷司令官。コードネーム：デナリ。

〈原田小隊〉

原田拓海　三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。コードネーム：ハンター。

待田晴郎　一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

〈姜小隊〉

姜彩夏　二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。コードネーム：ブラックバーン。

井伊翔　一曹。姜小隊のＩＴエンジニア。コードネーム：リベット。

〈訓練小隊〉

甘利宏　一曹。元は海自のメディック。コードネーム：コブラ・アイス。

花輪美麗　三曹。北京語遣い。コードネーム：タオ。

駒鳥綾　三曹。護身術に長ける。コードネーム：レスラー。

《水陸機動団》

司馬光　一佐。水機団格闘技教官。

●海上自衛隊

《北米支援艦隊司令部》

井上茂人　海将。護衛艦隊司令部幕僚長。

《第四護衛隊群》

• ヘリコプター搭載護衛艦ＤＤＨ-184〝かが〟（二六〇〇〇トン）

牧野章吾　海将補。群司令。

《第４航空群》

〈第３航空隊第 31 飛行隊〉

遠藤兼人　二佐。飛行隊長。

佐久間和政　三佐。機長。

木暮楓　一尉。副操縦士。
野本理沙　三曹。

●統合幕僚部
三村香苗　一佐。統幕運用部付き。空自E-２C乗り。北米邦人救難指揮所の指揮を執る。
倉田良樹　二佐。統幕運用部。海自出身。P-１乗り。

●在シアトル日本総領事館
一条実弥　総領事。
土門恵理子　二等書記官。

●ロスアンゼルス総領事館
藤原兼人　一等書記官。

【アメリカ】

●陸軍
・第160特殊作戦航空連隊〝ナイト・ストーカーズ〟
メイソン・バーデン　陸軍中佐。シェミア分遣隊隊長。
ニコラス・フィリップス　陸軍少佐。機長。
ベラ・ウエスト　陸軍中尉。副操縦士。
パーカー・ヘルナンデス　特技兵。機上整備兵。

●海軍
・アダック島施設管理隊
アクセル・ベイカー　海軍中佐。司令官。
ランドン・ロジャース　海軍少佐。副司令官。
スーザン・ベントン　少尉。管制塔管制官。
・ネイビー・シールズ・チーム７
イーライ・ハント　海軍中尉。
ホセ・ディアス　曹長。
マシュー・ライス　上等兵曹（軍曹）。狙撃手。
ティム・マーフィ　軍曹。

●ＦＢＩ
ニック・ジャレット　捜査官。行動分析課のベテラン・プロファイラー。
ルーシー・チャン　捜査官。行動分析課新人。
ロン・ノックス　捜査官。サルベージ班のハンドラー。

●ロス市警
カミーラ・オリバレス　巡査長。ヴァレー管区。

●テキサス州郡警察（ノーラン郡）
ヘンリー・アライ　巡査部長。
オリバー・ハッカネン　検死医。
トシロー・アライ　元警部。ヘンリーの父親。

●テキサス・レンジャー
デビッド・シモンズ　中尉。
〈〝グリーン24〞プラトーン〉
ドミニク・ジョーダン　軍曹。リーダー。通称〝サージャント〞。

●その他
西山穣一（にしやまじょういち）　ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レストランを経営。
ソユン・キム　穣一の妻。
千代丸（ちよまる）　穣一とソユンの息子。
根岸翔（ねぎしかける）　西山のレストランで働く学生バイト。
ダニエル・パク　下院議員。カリフォルニア州の大統領選候補。

【カナダ】

●カナダ国防軍（C）・統合（J）作戦（O）司令部（C）
アイコ・ルグラン　陸軍少佐。日本人の母を持ち、陸自の指揮（C）幕僚（G）過程（S）修了。

【ロシア】

●海軍

・特殊部隊第101分遣隊（スペツナズ）

レナート・カラガノフ　軍曹。スポッター。

マクシム・バザロフ　伍長。狙撃手。

・海軍航空隊

ボリス・イオノフ　中佐。

ヴィクトル・エフゲニフ　大尉。機長。

●ロシア空挺軍

《第83親衛独立空中襲撃旅団》

・第598独立空中襲撃大隊

ニコライ・ゲセフ　空挺軍大佐。大隊長。

パベル・テレジン　曹長。

【中国】

●人民解放軍海軍

《東征（ドンヂャン）艦隊》　空母〝福建（フージン）〟（八〇〇〇〇トン）

賀一智（ホヲイーチィ）　海軍中将。艦隊司令官。

黄誠（ホアンチョン）　海軍大佐。政治将校。

徐宝竜（シューバオロン）　海軍中佐。フリゲイト〝九江（ジウジアン）〟艦長。

《海軍陸戦隊》　075型揚陸艦〝海南（ハイナン）〟（四七〇〇〇トン）

楊孝賢（ヤンシャオシェン）　海軍中佐。隊長。

王高遠（ワンガオユエン）　海軍少佐。副隊長。

張旭光（チャンシューグアン）　海軍大尉。小隊長。

●在シアトル中国総領事館

公一智（ゴンイーチィ）　総領事。

アメリカ陥落5　ロシアの鳴動

プロローグ

川の向こうは、途切れることのない渋滞が続いている。テキサス州政府は、州内に入る避難民の数をコントロールするために検問所を設け、時々開け閉めしていた。検問を開ける時間は不定期で、二時間封鎖されていることもあれば、やっと開いたと思ったら、五分で閉鎖されることもある。

川の向こうからは時々銃声も響いてくれば、マズル・フラッシュの瞬きが夜空の彼方に反射することもある。川を渡った向こうには、もう文明はなかった。電気が止まってすでに一週間になる。上下水道も止まり、トイレも流れない。人口にして、全米の七割がそういう過酷な状況下に置かれていた。

ニューヨーク、ワシントンDC、五大湖周辺、フロリダ、そしてカリフォルニア州。電気と水道、電話、インターネットがあるのはここテキサス州くらいのものだった。

そして、北米中から、避難民がここテキサスへと押し寄せていた。アメリカに残された、最後の文明の在処がここテキサスなのだ。すでにテキサス州の人口三千万の半分に迫る一千万人規模の避難民が殺到していた。

だが、その全米でほぼ唯一とも言える安全なテキサス州から、外へ出ようとしている人々もいた。

州外へ出ようとする車は、ロジを拡大するための業者や州軍の車両を除いて、マイカーはいったん手前で止められた。燃料や食料、支援物資を積んだ民間業者の車両も、基本的に護衛を付けてのコンボイ移動だった。彼らはそれをワゴン・トレイン・フリート、〝幌馬車隊〟、もしくは頭文字を取ってＷＴＦと呼んでいた。

問題は、それ以外の一般民間人のマイカーだった。州外に暮らす家族の元へと向かう人々だ。危険を承知の彼らは、しかし途中まではＷＴＦの車列に同行するよう強く推奨されていた。そこから先は、それぞれ行き先別に別れて、見知らぬ者同士で幌馬車隊を組むよう、これも強く推奨された。

州政府としての立場は明確で、移動の自由を侵害する気は無いから、州外へ出ることは阻止しないが、安全を考慮するなら、せめて仲間を募って身を守ってくれということだった。州政府は、そのためのコーディネートをしているという立場だった。それに従うことなく川を渡る者がいるにはいたが、九割方の市民は、州政府の誘導に従った。

隣接州は、車に銃を何挺か積んでいれば無事目的地にまで辿り着けるという状況ではなかったからだ。一部に平和が保たれている地域もあるにはあったが、共和党系、民主党系の住民に分かれての銃撃戦も発生し、それぞれの党派をむき出しにして立て籠もっている状況だった。人種でもなく、どの政党を支持するかで安全が左右されていた。

そして、共和党系の安全地帯では、堂々と南部連合旗が掲げられていた。

テキサス州西部のスウィートウォーターという小さな町で日本食レストランを営む、ジョーイ・西山こと西山穣一とソユン・キム夫妻も、東へ向かっていた。八日前、スウィートウォーターを襲撃した巨大竜巻によって、ローンを組んで買っ

たばかりの自宅は全壊したが、幸い店は無事だった。だが、西山の愛車は竜巻で吹き飛ばされ、家族に唯一無事で残された財産は、妻が乗る中古のヒュンダイ〝ソナタ〟だけだった。バックシートに息子の千代丸（ちよまる）を乗せ、会社員時代の西山の同僚を迎えに出発したが、数日経ってようやくテキサスの外へと出られる。電気を始め、インフラが無事なテキサス州内でも、それほど状況は悪化していた。真っ先に悪化したのが道路事情だった。ガソリン・スタンドには長蛇の列で、燃料の入手が最大のハードルとなった。

ここオレンジに着いてからも、行き先別に集団を作らされ、ペーパーへの記入を求められた。強制ではないが、そうすることによってアドバイスできることもあるし、後々、貴方たちが行方不明になった時に、捜索がしやすくなるということだった。

西山らが乗るソナタは、サビーン川沿いの古い造船所の敷地内で、何度か移動を命じられていた。仮設トイレも置かれ、水とビスケット程度の補給も得られたので、贅沢は言えなかった。夜には、医療スタッフが一台一台車をノックしての健康チェックも得られた。

単に、寝る場所が車内というだけだ。うだるような熱帯夜が続いていたが、エンジンを入れっぱなしでエアコンを点けるわけにもいかず、藪蚊と戦いながらの睡眠だ。車用の電池式蚊取りマットがあったが、効果はいまいちだった。窓を全開した上で、夜は、破いたTシャツをダクトテープでウインドー部分に張った。

夜明けと同時に雨が降り出していた。

そして夜明けと同時にようやく動きがあった。暗い内は、州軍ですら川を渡ろうとはしなかった。それほど危険だった。

前方から、カウボーイハットに黄色い雨合羽を羽織った男性が、一台一台車をチェックしていた。雨合羽の裾下から、リボルバーを収めたホルスターが覗いていた。

彼はいったん車に乗り込み、数分話をしてから出てくる。と同時に、別のスタッフが、ワイパー部分に色が付いたリボンを結んでいた。それは合流すべきコンボイの目印らしかった。

西山らも、昨夕ここに到着した時点で、A4判のペーパーを一枚書かされていた。全員の氏名や年齢、目的や緊急連絡先。乗っている車の車種や残燃料まで書く欄があった。

「あの男のバッジ、あれテキサス・レンジャーじゃないか？」

「テキサス・レンジャーって、でももう二〇〇人もいないんでしょう？」

その男性はようやく、前に止まったフォード車に乗り込んでいた。フロリダで暮らす親のところまで、食料を届けに行くという六〇歳前後の白人夫婦が乗っていた。

その車での会話はほんの一分で終わったらしく、男性は、ようやく西山の車に寄ってきた。車内は、水や食料で一杯だったが、その男性が乗り込んでくることに備えて、後部座席に空間を作っておいた。息子の千代丸はまだ寝ていた。

「済まない！　ちょっとお邪魔する。雨のせいで、座席を濡らしてしまうが……」

と男性は、後部座席に乗り込んでカウボーイ・ハットを脱いだ。見事なまでに、ピカピカの、まるで剃り上げたみたいな頭だった。そのせいで年齢がよくわからなかった。五〇歳にも見えるが、七〇歳近くにも見える白人男性だ。

「デビッド・シモンズ中尉。テキサス・レンジャーだ」

「カウボーイ・ブーツじゃないんですね？」
とソユンが後ろを振り返りながら言った。
「ああ。あれはまあ、乾燥している時期は良いんだけどね。さすがにこういう天気じゃね」
靴はカウボーイ・ブーツではなく、タクティカル・ブーツだった。シモンズは、ボードに貼った家族の身上書を捲った。
「ええと、スウィートウォーターから州外に？　凄いな。何時間掛けて？」
「今日で確か三日目ですかね」
「お仕事はレストラン経営……。あそこは確か、ウォルマートか何かスーパーの近くにスシ・レストランがあったと聞くが……」
「ええ！　それがうちです」
「ああ、そうなんだ。いや、実は妻が韓国系でね。軍隊時代に韓国に駐留していた頃、向こうで一緒になった。隣がアビリーンでしょ。女房の韓国人社会の友だちが一人アビリーンにいて、半年くらい前に、スウィートウォーターで評判のお店があるから、一度食べにいかないか？　と誘われたんだ」
ソユンは、スマホを出して慌てて写真を捲った。そして、店内で撮った写真を一枚見せた。
「彼女じゃないですか？　パクさん」
「あ、そうそう！　この人。韓国系神父がいるダラスの教会の慈善バザーで知り合った。なんだ、テキサスも狭いな……」
「彼女、以前は月二回はいらしていたけれど、最近会ってないような」
「それがね、あれは春先だったかな。図書館から帰る時に、階段を踏み外して腰を折って、一ヶ月くらい入院していたんだよ。今もまだ車椅子生活のはずだ」
「あら、そうなんですか。お見舞いの花でも届け

ないと」
「スウィートウォーターと言えば、この危機の直前に、でかい竜巻被害があったよね」
「はい。家は全壊して、今この車に積んでいるものが我が家に残された唯一の財産です。でも幸い店は無事でしたから」
「そんな状況なのに、わざわざ友だちを助けに行くの？　サムライだねぇ！　旦那さんはまだ日本国籍のままだから、ダラスの領事館へ駆け込めば、日本行きの便に家族で乗れるだろうに」
「迎えに行くと言っちゃったらしいんです」とソユンは眉をひそめた。
「こんな時でも移動の自由はあるからね。アメリカじゃ、そういう権利は侵害できない」
「テキサス・レンジャーがこういう所を管理するんですか？」
「そう。テキサスと隣のルイジアナを結ぶルートというか橋は七、八本あるんだが、そこを警察や州兵、消防、自治体でコントロールしているわけだけど、誰かが指揮官として責任を負わなきゃならない。そういう時に、テキサス・レンジャーが一人いると、各方面スムーズに回るわけ。それはテキサス・レンジャーが決めたことだから黙って従うしかないとか、何か事故でも起こったら、それはテキサス・レンジャーの責任だから、俺たちの責任じゃないと言い逃れも出来るし。ところで、銃はあるね？」
「ダッシュボードに」
「なら良い。ライセンスを見せろなんて野暮なことは言わない。けれど、もし銃撃戦になったら、みんなの後ろに隠れるように。それがコンボイのルールだ。子供が乗っていたら、前には出ないこと。それと、保証は出来ないからここだけの話だが、携帯のカバー・エリアを拡大する計画が進ん

でいる。気球とか、中継器を積んだ無人機とかでね。全米でそういう機器や飛行機を開発している連中がテキサス入りしていて、州境を越えて空から中継局を提供しようと頑張っている。低軌道衛星では、やはりいろいろとハードルがあるらしくてね。だから、携帯のバッテリーは大事に使ってくれ。回線は細いし二四時間提供もできないが、運が良ければ繋がるかも知れない。

ここから橋を渡って三〇マイルのレイク・チャールズまでではほぼ安全だ。テキサスの補給路が生きている。だが、法執行は、原則として州外では行使できないから、ここにチェックポイントを作っている。その安全圏をさらに六〇マイル先のジェニングスまで広げ、最終的には、二〇〇マイル東のニューオリンズまで延ばそうという計画なんだが、それは現状ではかなり困難だろうな。これも何かの縁だ。君たちだけに名刺を渡しておく。私が出なかったら、オフィスに掛けてくれ。可能なら、助けを出す。これも内緒の話だが、テキサスへ戻る州民を救うために、隣接州の何カ所かに、こっそりと救出部隊を展開させている。彼らに要請できるかも知れないから」

シモンズは、雨合羽のポケットから名刺を出してソユンに手渡した。

「しかし、旦那さん喋らないね？」

「いつまで経っても英語を覚えないんですよ」

「うちの女房もそうだったよ。でも、それが逆にキュートでね。あの頃は！――」

とシモンズは笑ってドアを開けた。

「このシートに乗る分の補給物資を後で届けさせる。特別扱いじゃない。子持ち家族にはみんなそうしている。無事を祈っているよ。だが正直、ここから一〇〇マイル先に文明は無いぞ。銃と暴力が支配する無法地帯だ」

シモンズが後ろの車へと移動すると、「酷い南部訛りだったじゃないか！　全然聴き取れなかったぞ」と西山はぼやいた。

「そう？　普通だったわよ。パクさんの番号、手元にあるから、あとでお見舞いのメールを送っておかきなゃ。やっぱりこういう時は、血の繋がりというか、民族の助け合いよね」

昨日の朝も、韓国系アメリカ人のガス・ステーション経営者に路上でガソリンを給油してもらった。

今日の日没まで走って、どこまで辿り着けるかだ。普通なら、昼頃にはニューオリンズまで着いているが、この二日間を考えるなら、その半分も走れれば十分だろう。どこか安全な街で夜を過ごせれば良いがと西山は思った。

アメリカは、ディストピア世界と化していた。大統領選挙の有効性を巡る各州大陪審判決をきっかけに全土で暴動が発生し、同時多発的に発生した大停電も重なり、略奪や放火が相次いだ。首都ワシントンDCでは、催涙弾のガスが官庁街を覆って政府機能が麻痺し、ホワイトハウスは、イギリスから駆けつけた英国軍海兵隊によって守られていた。

ニューヨーク・マンハッタン島は、略奪と放火で阿鼻叫喚の地獄絵と化し、島外へと通じる橋は焼け落ち、トンネルでは今も黒煙が上がっている。辛うじて生き延びた人々は、セントラルパークに立て籠もり、あるいは細々と運行されるフェリー乗り場へと決死の脱出行を続けていた。

カリフォルニア州も、ロシアの潜入工作員らによる放火や破壊工作で送電網が殺られたことで、ロスアンゼルス、サンフランシスコと治安が崩壊した。

今ようやく、ＬＡＸ、ロスアンゼルス国際空港の治安を復旧し、外国人避難民の脱出と、太平洋諸国からの援助便の受け入れが始まっていた。

沖合では、出動を禁じられたアメリカ軍を牽制する中国海軍の三隻の空母機動部隊と、海上自衛隊が険しい鍔迫り合いを演じ、海上自衛隊は、昨夜護衛艦一隻を失っていた。

暴徒による破壊は今も続いており、電力復旧を試みる作業も、各所で作業現場が襲撃を受け続けていた。山火事も延焼し続け、限られた兵力でアメリカを支援しているカナダ国防軍も苦境に陥り、カリフォルニアの治安回復を請け負った自衛隊は、結局出撃拠点としたワシントン州に戻って戦う羽目に陥っていた。

たった一週間で、アメリカ合衆国は、アフリカ大陸の最貧国並みの混乱した状況に陥っていた。そこには、エアコンを動かす電力はもとより、夜を過ごすための灯りもなく、手を洗える水もなければ、清潔なトイレすらなかった。そこを支配していたのは、文明や法律ではなく、銃と暴力だった。

第一章　シアトル空港

陸上自衛隊・第1空挺団第403本部管理中隊、その実特殊作戦群隷下・特殊部隊〝サイレント・コア〟を率いる土門康平陸将補は、アメリカ北西部の大都市シアトルにいた。シアトル・タコマ国際空港の北東部、南北の長さ三〇キロもあるワシントン湖の南端にボーイングの工場があり、そこに併設するレントン空港の西側エプロンにいた。

日本から持ち込んだ連結型指揮通信&ライフ・サポート車両〝メグ〟&〝ジョー〟のうち、指揮通信車両〝メグ〟にいた。

M32グレネード・ランチャーでひと仕事終えた土門は、モニターが上下三段に並んだ指揮通信コンソールの背後に立っていた。〝99パーセント〟、あるいは〝セル〟を名乗る武装した暴徒に向かってグレネード・ランチャーをぶっ放したせいで、両手が火薬の煤まみれだった。

たぶん何人も死んだだろうが、良心が痛むことはなかった。

隣で、娘の土門恵理子外務省二等書記官が、シアトル総領事と部隊の無線で話していた通話を切った。

「原田さんと無事ご対面したそうです。総領事館員全員の無事を確認済みです」

「どんな男なんだ？　その総領事って」

「別に普通の外交官よ？　でも、外務省勤めは戦後からのまだ三代目だから省内では新参者扱いね。神経質で、選民思想もないし。外交官と財務官僚以外はみんなバカだと広言しているけれど。高いワインを税金で買いまくる以外は、愛車はずっとＢＭＷで、質素な暮らしだし。つまり、極めて平均的な外交官です」

「閣下、と呼ばなきゃならんのか？」

「さすがにそれはもう止めたわね。まあ北米大使くらいは閣下呼ばわりした方が良いけれど。あでも、『領事』じゃなく『総領事』と呼んであげて。でないと一瞬表情が曇るから」

リンク16のモニターに視線をくれると、四機編隊の大韓航空機がシアトルを避けてヤキマ上空を飛んで南下を続けていた。指揮通信コンソールを仕切るガルこと待田晴郎一曹がトラックボールを操作して、別のモニター画面にテキスト情報を呼び出した。

「情報来ました。この四機ですね。表向きは、支援物資を搭載していることになっていますが、実際は韓国兵が乗っているはずです。陸軍か海兵隊かはわかりませんが。このままＬＡＸに降ります。機材はボーイングの777なので、たぶん大隊か連隊規模の兵力でしょう」

「やっとか。そっちはナンバーワンに任せよう。時間のロスは大きいのか？」

「そうですね。ヤキマは沿岸部から四〇〇キロは内陸ですからね。シアトル沖を南下できれば、三〇分は短縮できたはずです。帰国便もヤキマ上空経由のバンクーバーでテクニカル・ランディング、給油ですから。シアトル空港は、今日中に復旧させる必要があります。中国側は、航路の安全は保証するようですから、飛ばないという手は無い」

「ここにいても仕方が無いぞ。空港へ行こう」

「危険ですよ。そこいら中にセルのメンバーが潜んでいる。この車両、図体がでかいから、ロケット弾でも撃たれたら避けようがない」
「なんでだ……。ここはシアトルだろう？　全米でも屈指の好景気都市なのに、なんでそんな所で暴動なんて起きるんだ？　みんな良い給料を貰っているだろう？」
「そうね、ＧＡＦＡＭの社員なら、初任給で一〇万ドル越えよね。ほんの数年で、年収二〇万ドルにアップする」
　と娘がため息交じりに解説を始めた。
「でも、アメリカって所も、税金は決して安くないのよ。そこまでサラリーが上がると、半分は税金に持って行かれる。そしてここシアトルの部屋の賃料は、コロナ明けから、年率二〇パーセント台で高騰している。値上がり率では、全米主要都市ベストテンの常連よ。今、ここのダウンタウンだと、邦貨にして月額の賃料がワンルーム、七〇万とかそのくらいかしら。仮に二千万円の年俸があったとして、半分を税金や社会保険料に取られ、残る一千万で、暮らさなきゃならないのよ？　どんなに安い部屋を探しても年五〇〇万、通勤圏内に拘るなら残る手取りの八割を出さなきゃならない。だったら、ＧＡＦＡＭの稼ぎがあっても公園で野宿するしかないわよね？　テントを張って暮らすしか無いわ」
「変だろう？　それは。市場原理に反している。払えないほどの賃料なら自然に値下がりするものだろう」
「それが資本主義社会のリアルってものよ。ＧＡＦＡＭに勤めていて、年収三〇万ドル貰っているエンジニアが、テント暮らししていても全然不思議じゃないのが、ここシアトルよ」
「じゃあ、お前達外交官はどんな部屋に暮らして

いるんだ？」
「私の本給と、国が負担してくれる私の部屋の賃料はたいして変わらないでしょうね。最近は、韓国や中国の領事館員の方が、われわれより良いエリアに暮らしているけれど」
「解放軍に動きはあったか？」
　土門は待田に聞いた。人民解放軍の海軍陸戦隊が、シアトル空港敷地隣と、南西のフォート・ルイス陸軍基地に上陸していた。
「まんまとしてやられましたね！　米軍自らこちらの管制に割り込んで、ＪＡＳＳＭ－ＥＲの座標を打ち込んで発射したのに、犠牲はほとんど出なかったらしい。死傷者は僅かでしょう。スキャン・イーグルで見る限りは、もう死体も負傷兵も確認出来ません」
「なんでだよ？」
「彼ら、空挺堡を確保したら、すぐさま米軍というか、われわれの攻撃があることに備えていたようです。ミサイルの座標を打ち込むのに十分な時間そこに留まって、あっさりと後退した。ほんの二、三〇〇メートル。われわれは無人の場所にミサイルを撃ち込んだんです。恐らくは一個か二個中隊が無傷のまま、まだそこにいます。フォート・ルイスは、米陸軍が対処するでしょうが」
「じゃあ、シアトル空港南西エリアに展開した敵は無傷なんだな？」
「はい。ほぼ無傷な状態です。空港南西側の工場街と森に立て籠もっています。ターミナル・ビルとの最短距離は一三〇〇メートル前後。ただ、向こうもドローンは飛ばしてますから、空港に中隊規模の増援が入ったことは確認しているはずです。攻めてくるとしたら、遮蔽物の無い滑走路を横切ってターミナル・ビルと撃ち合うことになる。そんな無茶はしないでしょう。攻めあぐねているは

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。